

〔特別寄稿〕

日本語複合名詞の母音交替

小林 泰秀

Ablaut of Japanese Compound Nouns

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

This paper describes Japanese ablaut from the historical point of view.

The ablaut is said to be a morphological phenomenon which occurred in ancient Japanese. For example, the vowel differences of /a/ and /e/ are seen in the words *amagumo* 'rain cloud' and *amefuri* 'rainfall'; /u/ and /i/ in *kamumiya* 'Shinto shrine' and *kamiwaza* 'work of God'; and also /o/ and /i/ in *konoha* 'leaves of trees' and *kinobori* 'tree climbing'.

These vowel changes of compounds are due to the strength of the boundary between two words, that is, morphemes. When two morphemes construct a strong linking compound, a low vowel /a/ and back vowels /u, o/ are pronounced, and when two morphemes construct a weak linking compound, front vowels, high front /i/ and mid front /e/ are pronounced. We say that strong linking compounds have a morpheme boundary between two morphological elements and weak linking compounds have a word boundary between them. These ablaut phenomena are explained by the front and back movements of the tongue in word-final positions.

1. はじめに

文字にはそれ自体で意味をなすものと、それ自体では意味をなさないが発音を表示するものがある。前者としては漢字が典型的なものであり、後者は仮名がそうである。例えば、「酒」、「上」はそれ自体が意味に対応する表語文字であり、その発音を表す仮名「さ・け」、「う・え」はそれぞれ表音文字である。「酒」、「上」は1語では「さけ」、「うえ」と発音されるが、複合語の「酒屋」、「上役」では「さか」、「うわ」と発音される。このような e ~ a の母音交替は仮名を用いることで発音の違いが明確にされる。ところが、古代語では漢字と発音の間のずれはなく、次のように母音の交替がある語には、異なる漢字が使用されている。次の資料は『日本国語大辞典』（小学館、2000）からのものである。

(1) 万葉漢字の母音交替

a. 「酒」

万葉（8 c 後）5・852「梅の花夢（いめ）に語らくみやびたる花と吾（あ）れ思（も）ふ左気（サケ）に浮かべこそ〈大伴旅人〉」

万葉（8 c 後）5・840「春柳かづらに折りし梅の花たれか浮かべし佐加（サカ）づきの上に〈(氏不祥) 彼方〉」

b. 「上」

万葉（8 c 後）17・3898「大船の字倍（ウヘ）にし居れば天雲のたどきも知らず歌乞わが背（せ）〈作者不祥〉」

万葉（8 c 後）5・897「ますますも重き馬荷に表荷（うはに）打つと云ふ事の如（ごと）〈山上憶良〉」

万葉漢字は仮名の要素が強く、同じ語が常に同一の文字で表されるとは限らない。例えば「人」には「比止」,「比登」,「臂等」,「必登」などの文字があり（有坂 1955: 187）,「心」には「許許呂」,「許己呂」,「己許呂」,「己己呂」,「去去里」の五種類の表記がある（大野 1998: 10）。

e ~ a の母音交替を別の漢字で表している万葉漢字は、表語文字であると同時に表音文字でもある。時代と共に複数の漢字が一つの漢字に統一されると、漢字は意味に対応する表語文字となり、発音に対応する表音文字の役割はなくなっていく。そして、発音は仮名文字が担うことになる。

他方、万葉漢字では異なる発音の文字が一つの漢字で表わされるようになると、「酒」,「上」は語末音の「さけ」,「うえ」と語中音（酒づき、上荷）の「さか」,「うわ」の二つの発音を持つことになる。これら二つの発音は起源上、全く別の語に由来するという見方もあろう。しかし、e ~ a のような複合語の母音交替には規則性が見出されることから、歴史的な音韻変化を考察するのも意義のあることである。

有坂氏（1957: 3）は、「あめ」（雨）に対して「あまがさ」（雨傘）がある現象を、「或名詞的語根は、他の語根の前について、それと共に一つの熟語を作る場合、その末尾の母音を變化する」と述べている。これは、「雨」は単独語としては「あめ」と発音されるが、複合名詞になると「あま」に變化するということである。現代語の見地からすると、単独語の「あめ」を基本形と考えるのは当然である。有坂氏（1957: 50）は、「あめ」のような e の形を「露出形」,「あま」のような a の形を「被覆形」と名付けている。

有坂氏の考えに対して、松本氏（1995: 15）は、「あま」が基本形であり、ama → ame の母音交替が行われたと主張している。松本氏は「あま」のような形を「連結形式」ないしは「開

き形」と呼び、「あめ」のような形を「断止形式」ないしは「閉じ形」と呼んでいる。松本氏の「あま」を基本形とする考えは、 $o \rightarrow i$ と $u \rightarrow i$ の交替現象をも同時に説明できるものである。

本稿は松本氏の考えに従って「あま」を基本形とし、語幹が第1要素として現れる「雨傘」(あまがさ)のような複合語を連結複合語、「雨降り」(あめふり)のように2語間の連結の弱い複合語を断止複合語と名付ける。

日本語には、次の三つの母音の交替が見られる。例えば、「稲妻」,「稲虫」の「稲」は「いな」と発音されるが、「稲刈り」,「稲分け」の「稲」は「いね」と発音され、 a と e の交替がある。更に、「火代(ほしろ)」,「火窪(ほくぼ)」の「ほ」と「火掛かり」,「火口」の「ひ」には o と i の交替があり、「口歌(くつわ)」の「くつ」と「口車」,「口先」の「くち」には u と i の母音交替が見られる。このような母音交替を音韻的に説明するのが本稿の目的であるが、更に、二つの複合名詞の意味の違いについても考察したい。

2. u と i の母音交替

母音の歴史的交替は、どちらかが基本形であり、それがある音韻環境において発音変化が起ったと考えるのが一般的である。まず $u \sim i$ の交替を「神」の発音に見てみよう。第1要素の「神」は、次のような複合語では「かむ」と発音される。二つの名詞間のつながりの強い複合語を連結複合語と名付けたが、名詞間には形態素境界 [+] があるとするとする。なお、次の語彙は、『広辞苑』(第五版)からのものである。

(2) 語幹末 u の複合名詞

[kamu+sugi]_N 神+杉 → 神杉

神丘, 神木, 神上がり, 神祖(かむおや), 神立ち, 神登る, 神譲る(かむはかる), 神性(かむさかり), 神庭, 神宮, 神葬(かむはぶる), 神掃う

「神」は語末では「貧乏神」,「女神」のように $kami$ に発音される。 $kamu$ が語末で $kami$ に変化したのか、 $kami$ が語中で $kamu$ になったのか調べる方法の一つに母音調和がある。仮に、 $kami$ が $kamu$ のように語末母音が後舌化したとすると、 $kami+sugi \rightarrow kamusugi$ 「神杉」, $kami+uta \rightarrow kamuuta$ 「神歌」は母音調和で説明できるが、 $kami+ki \rightarrow kamuki$ 「神木」, $kami+niwa \rightarrow kamuniwa$ 「神庭」は異化ということになり、一貫性にかける。このことから、本稿では母音調和に触れずに、複合語での交替母音は、語幹と次の語とのつながりによって起っ

ていると考える。

(2)に挙げた複合名詞は、一つの独立した語としての要素が強く、むしろ古い形であるので、松本氏に従い、語幹「神」は「かむ」が基本形であるとする。もちろん、有坂氏のように単独発音の「かみ」が基本形であり、複合語で「かむ」に発音されるようになったという考えもあるが、その具体的説明は、議論の進行上、後回しにする。

「かむ」が語末で「かみ」に発音されるようになったとすると、「かみ」を第1要素とする「神遊び」のような複合語は、語中に語境界 [#] を取り、(2)のような語彙化した複合語よりは、むしろ句の性格を持った、語幹と次の名詞とのつながりの弱い複合語である。これを本稿では、松本氏の言葉を借用して断止複合語と呼んでいる。

(3) 語幹末 i の複合語

[kamu#asobi]_N → [kami#asobi]_N 神遊び

神集め、神上げ、神隠し、神助け、神寄せ、神心、神様、神棚、神の国、神の子、神の使、神の道、神の代、神仏（かみほとけ）、神業

「神の子」のような連体格を示す助詞「の」の付加や「神仏」のような等位構造の語は、その並べ語を見ると名詞句のように思われるであろう。しかし、「神の子」は「イエス・キリスト」のことであり、「神仏」は「神と仏」だが「しんぶつ」を意味しているので、複合語であり語彙化したものである。このような断止複合語は複合語と句の中間の性格を持つものであるが、非生産的という面で句とは言えない。「神心」（かみごころ）（「神のおぼし召し」の意）は複合語であり、一方、生産的な名詞句である「神の心」は、その構造が [語幹 # 名詞]_{NP} であり、辞書には掲載されない。

「神」を第1要素とする複合語には、「かむ」と「かみ」の二つの発音を持つ語も次のように多い。

(4) かむ～かみ

神歌（かむ／みうた）、神風、神柄（かむ／みから）、神司、神所、神殿守（かむ／みとのもり）、神部（かむ／みとも）、神漏岐（かむ／みろき）、神漏美（かむ／みろみ）、神言、神上がる、神去る、神問わし、神懸り

「かむ」と「かみ」の二つの発音が存在することについては、二つのことが考えられる。一つは、連結複合語に加えて、名詞句の意味合いを持つ断止複合語が出現し、それに伴い形態素

間の境界も [+] から [#] へと変化したというものである。二つには、連結複合語の性質は変わらないが、歴史の経過と共に、現在の単独語の発音に合わせて、i に前舌化したというものである。筆者は発音による意味の違いが認められない語においては、後者の考えを取り、本来、語末で発音されていた「かみ」が、語中でも発音されるようになったと考える。(2)に挙げた語は依然として「かむ」と発音されているが、これらの語は一つのまとまりとしての要素が強いためである。一方、(4)の語は、連結複合語としての要素が弱まってきたと考えるよりは、「かみ」も連結複合語に現れるようになったと考える。これは、時代と共に、基本形が「かむ」から現代語の形の「かみ」へ移行してきたことと関係があると思われる。つまり、例えば「神風」は、現代では連結複合語として [kamu+kaze]_N と [kami+kaze]_N の二つの形があり、それがやがては将来、断止複合語 ([kami#kaze]_N) としての意味合いを持つことになることが予想される。[kami+kaze]_N のような複合語は、発音上は断止複合語であるが、構造的にも意味的にも連結複合語である。

随意的ではあるが、語中の kamu の u が削除され、撥音便になる語や kami に変化する語も次のようにある。

(5) 「かむ」の撥音化

- a. [kamu+be]_N → kanbe 神部
- b. [kamu+ko]_N → kanko ~ kamiko 神子 神無月 (かみ/んなづき), 神事 (かみ/んなわざ)
- c. [kamu+dati]_N → kamudati ~ kandati 神館
神実 (かむ/んなぎね), 神宝, 神嘗 (かむ/んなめ), 神主
- d. [kamu+tukasa]_N → kamudukasa ~ kandukasa ~ kamidukasa 神司
[kamu+tomo]_N → kamutomo ~ kanbe ~ kamitomo 神部

(5)の語は、すべて連結複合語と認められるものである。(5a)と(5b)の語は撥音化と共に「かむ」の発音が消滅している。(5a)の「神部」には「かむとも」と「かみとも」の読み方もあるが、これらはすべて連結複合語であり、その意味は「①大和朝廷の祭祀に奉仕した神官。②律令制で、神祇官に属して祭祀に奉仕した下級神官」である。境界によるはっきりした意味の違いが見られるのは、「神語り」である。『広辞苑』によると、「かみがたり」は「上代歌謡の一」であり、「かみがたり」は「神が人にのりうつって語ること。また、神についての物語」である。「かみがたり」は「かむがたり」の撥音化した連結複合語であるが、「かみがたり」は、その意味からして断止複合語と見なされる。

3. o と i の母音交替

o と i の交替を「木」を語幹とする語に見てみよう。「木」は、「木陰（こかげ）」と「木枕（きまくら）」のように、「こ」と「き」に発音される。「木」は語末では「草木」, 「積み木」のように「き」と発音されることから、「木陰」は形態素境界を取る連結複合語であり、「木枕」は語境界を取る断止複合語である。「木」が「こ」と発音される複合名詞に次のものがある。

(6) 語幹末 o の複合名詞

[ko+kage]_N 木陰

木障（こさ）、木立、木場、木暗がり、木暮る（こぐる）、木深い、木枯し、木の蔭、木の暗れ・木の暮、木の下、木の葉、木の末（このうれ）、木の間（このま）、木の道、木の根

「木（こ）の蔭」, 「木（こ）の下」, 「木（こ）の葉」, 「木（こ）の根」は、『広辞苑』によると、その意味を「木（き）の蔭」, 「木（き）の下」, 「木（き）の葉」, 「木（き）の根」と名詞句のように記しているが、これらの語は「木」と次の名詞との連結の強い複合語である。

「木」が語末にあって「き」と発音される断止複合語には次のものがある。

(7) 語幹末 i の複合名詞

[ki#kire]_N 木切れ

木組み、木守り、木登り、木立ち、木鯛、木馬、木裏、木表、木型、木木、木杭、木釘、木柄、木倉、木酢、木槌、木納屋、木場、木仏（きほとけ）、木彫、木枕、木遣（きやり）、木の香（か）、木の頭（かしら）、木の道、木の耳、木の端

「木」の基本形は「こ」である。だからと言って、(7)の語が古くは「こ」と発音されていたというのは疑問であり、その証拠はない。例えば、「木鯛」が、古代では複合語として「こだい」と発音されていたのが、中世以降「きだい」と発音されるようになったとは思われない。「木鯛（きだい）」という語が使われ出した時点から、「木彫りの鯛」という断止複合語の意味だったと思われる。

「木場」には「こば」と「きば」の発音があるが、一般的に考えられるのは、古くは「こば」と発音されていたが、後に「きば」とも発音されるようになったというものであろう。しかし、

この二つの発音には、意味に違いがある。『広辞苑』によると、「こば」は「①山で伐った木を集めて置く山間の狭小な平地。仕事場・休み場などにも利用。②山間の農作地。焼畑をもいう」であり、「きば」は「①材木を貯えておく場所。②材木商の多く集まっている地域」である。二つの発音による意味の違いを見ると、意味の変化と捉えるよりは、後になって新しい断止複合語として「きば」が用いられるようになったと考えるべきであろう。

「木立」と「木立ち」は「こだち」と「きだち」と発音されるが、二つの意味は同じで、連結複合語の「こだち」である。しかし、両者には「木立」は連結複合語であり、「木立ち」は断止複合語であるという形態的構造の違いが感じられる。ここにもまた、古い「こ」の形態から、新しい「き」の形態への移行がうかがえる。

「木場」のように漢字が同じで二つの発音のある語は、語源が同じかどうかの問題になるが、次の語は、若干の意味の違いがあるものの、語源が同じであり、母音交替の起ったと思われるものである。

(8) こ～き

木屑 (こ／きくず), 木口 (こ／きぐち), 木の実 (こ／きのみ), 木の芽 (こ／きのめ)

古い発音と新しい発音が共存している語においては、通常『広辞苑』は古い方を載せているが、逆の場合もある。『広辞苑』には「木炭」と「木太刀」の発音として、「きずみ」と「きだち」は載っているが、古い発音の「こずみ」と「こだち」は載っていない。使用頻度が低いため削除したのであろうが、時代と共に単独語の発音の「き」が残る傾向があり、古い「こ」の発音が消えつつあることを暗示していると思われる。ちなみに『日本国語大辞典』には「こ」と「き」の語が載っており、「こずみ」も「きずみ」もその意味は同じく「もくたん」であり、「こだち」も「きだち」も同じく「木刀 (ほくとう)」の意味である。

u～iの母音交替は、uからiへの変化の前舌化である。一方、o～iの母音交替は、oからiへの前舌化と同時に、高舌化も行われている。母音交替が前舌化のみであれば、oはeと発音されるはずである。前舌化・後舌化の母音交替をもう一例見てみよう。

4. a と e の母音交替

a～eの交替は、我々が日常用いる語にも良く見られ、本稿で扱う三つの母音交替では最も多いものである。いくつかその例を見てみよう。

(9) a～eの交替名詞

a. 1音節語

手：手繰る（たぐる）、手綱（たづな）— 手下（てした）、手数（てかず）

目：目差（まなざし）、目映い（まばゆい）— 目薬（めぐすり）、目覚し（めざまし）

b. 2音節語

稲：稲妻（いなづま）、稲穂（いなほ）— 稲刈り（いねかり）、稲扱き（いねこき）

上：上掛け（うわがけ）、上面（うわづら）— 上様（うえさま）、上下（うえした）

風：風上（かざかみ）、風車（かざぐるま）— 風台風（かぜたいふう）、風通し（かぜとおし）

酒：酒盛り（さかもり）、酒屋（さかや）— 酒漬け（さけづけ）、酒太り（さけぶとり）

船：船出（ふなで）、船酔い（ふなよい）— 船差（ふねさし）、船釣（ふねづり）

胸：胸板（むないた）、胸元（むなもと）— 胸気（むねき）、胸幅（むねはば）

(9)の語幹は、単独で発音すると語末母音がeであることから、連結複合語はa、断止複合語はeが語幹末母音であると考えられる。aとeの母音交替を「雨」の語で更にくわしく見ていこう。

「雨」が「あま」と発音される複合名詞には次のものがある。

(10) 語幹末aの複合語

[ama+kaze]_N 雨風

雨脚、雨蛙、雨靴、雨雲、雨車、雨気（あまけ）、雨合羽、雨笠、雨具、雨縁、雨戸、雨樋（あまどい）、雨支度、雨空、雨水、雨羽織、雨袴（あまばかま）、雨傘（あましずく）、雨承け（あまうけ）、雨曇り（あまぐもり）、雨乞い、雨続き、雨垂れ、雨晴れ（あまはれ）、雨晴らし（あまばらし）、雨漏り、雨除け（あまよけ）

「雨続き」、「雨空」は、我々は通常「あめつづき」、「あめぞら」と発音している。しかし、このように語末母音を取る名詞句の発音は、辞書には載っていない。連結複合語としての意味を保持したいため、生産的になりつつある「あめ」の発音を現時点ではまだ認めがたいのであろう。「雨晴らし」は「あまばらし」で連濁が起っているが、「雨晴れ」は「あまはれ」である。この両者には一貫性がない。連濁のない古い発音が連結複合語として保持されている例である。「晴れ」はほとんどの複合語において、「秋晴れ」、「五月晴れ」、「梅雨晴れ」、「日本晴れ」、「夕晴れ」のように「ばれ」と濁音になる。

「雨」が「あめ」と発音され、断止複合語の意味合いを持つ語に次のものがある。

(11) 語幹末 e の複合語

[ame#kaze]_N 雨風

雨霰 (あめあられ), 雨露, 雨跡, 雨男, 雨女, 雨雫 (あめしずく), 雨台風, 雨降りし, 雨降り, 雨の脚

「雨風」は、「あまかぜ」は「雨気 (あまけ) を含んだ風」の意味であり、「あめかぜ」は「雨と風」の意味である。意味の違いから二つの語は語源が別であり、独自に出現した連結複合語と断止複合語であると言える。しかし、意味の拡大や追加がある場合には、二つの語は語源的に関連があると考えられる。例えば、「雨雫」である。「あましずく」は「あまだれ。軒先などから落ちる雨水」であり、「あめしずく」は「雨のしたたり。また、女がさめざめと泣くさまのたとえ」である。両者に共通した意味は「したたり落ちる雨」であり、人の涙にたとえているのは「あめしずく」の方だけである。このことから「あめしずく」には、後になって意味の追加があったと思われる。「雨雫」のように意味の追加のある語については、語幹末の発音だけで連結複合語か断止複合語かを判断するのは難しい。意味の追加があっても連結複合語の域を出ていないと見なされるからである。筆者は「あめしずく」には「雨のしずく」という意味が含まれていることから、意味の追加と共に断止結合語を生んだと考える。

「雨」が第1要素に来て、「あま」と「あめ」の二つの発音を持つ複合語に次のものがある。

(12) あま～あめ

雨上がり, 雨脚・雨足, 雨冠 (あま／めかんむり), 雨粒, 雨催い (あま／めもよい), 雨模様

「雨上がり」には「あま」と「あめ」の発音があるが、「雨降り」は「あめ」のみである。どちらも現代の見地からすれば、この二つの語は名詞句の意味合いを持つ断止複合語に解釈されることから、「あまあがり」は母音調和が随意的に適用された発音 (ame#agari → amaagari) であり、「あまふり」という発音 (ame#furi → *amafuri) がないのは、母音調和がなされる環境にないからだという考えもあるだろう。しかし、(11)と(12)の語の中には、同様な母音調和が起きても良い語がいくつかあり、決め付けることはできない。更に、『日本国語大辞典』には、「雨降風間」の発音として、「あまふりかざま」と「あめふりかざま」の発音が載っている。このことから筆者は、複合語での母音交替を優先し、「あまあがり」が一般的に言われていた時

代には、「あまふり」の発音も聞かれたと推察する。これまでも再三述べてきたように、単独語の発音が、時代の変化と共に複合語の基本形となりつつあるのである。

u ~ i の母音交替は前舌化によるものであり、o ~ i は前舌化と高舌化によると述べた。u はそれ自身が i と同じ高母音であるため、高舌化は余剰的である。a ~ e の母音交替は a から e への変化であるが、出力母音の e は a より前舌であって高舌であることから、前二つの母音交替と同様に、a → e も前舌化と高舌化の現象である。この母音交替を音韻的に説明すれば、語幹に前舌・高母音の i が付加され、音変化が起ったということになる。

語幹末に付加される i について松本氏 (1995: 37) は、「名詞的形式の場合、その語幹末に接する -i は、上代語で特に動詞の前にひんばんに用いられる「強調詞」i (たとえば, i-papu [這], i-kakuru [隠], i-tatasu [立], i-masu [坐], i-noru [祈] 等々) と起源的に同一の形態素である」と見なす解釈がおそらくもっとも妥当と言えよう」と述べ、音変化については、同ページで、「このように、a ~ e₂, o/u ~ i₂ の交替の通時的プロセスは、音声・音韻の見地からも、また形態的観点からも、それぞれ、a-i>e₂, o-i, u-i>i₂ という形の音変化として最も合理的に説明され得るであろう」と述べている。上代語に全く疎い筆者は、強調の接尾辞 -i の出所など知る由もないので、松本氏の提案は渡りに船である。母音交替を音韻的に記述すると次のようになる。

(13) 母音交替規則

- a. kamu+i# → kamii → kami 「神」
- b. ko+i# → kii → ki 「木」
- c. ama+i# → amee → ame 「雨」

母音交替は、二重母音が長母音に発音され、やがて日本語の CV 音節形態にそって、母音が短母音に発音されるようになったと考えられる。ama+i# の語末母音 a+i は、互いに融合して前舌中母音の e に発音される。このような母音の融合は、aka+i 「赤い」がある方言では akee, あるいは ake と発音されるが、akii, あるいは aki とは発音されない現象と似ている。「赤い」も語幹と基本形は aka であり、ake ではない。

筆者の母音交替の記述は、母音は五つであるという現代語の見地からのものであるが、古代語にはそれ以上の母音があったという通時的見地からみると、音変化の記述が変わってくる。松本氏 (1995) は語末の i を「乙類」の i₂ と呼んで「甲類」の i₁ と区別し、i₂ と e の二つの母音は接辞 -i の添加によって作り出されたものであると、次のように述べている。

(14) i と e の出現 (松本 1995: 89)

この母音組織をもたらした主たる通時的プロセスは、語幹末における o/u-i> i, a-i>e の音変化である。この結果、語幹の末尾音節において、ゲルマン語の「ウムラウト」にも比すべき母音の交替現象が現出した。

松本氏の考えは、a-i の連続音が融合して二つの中間音の e の発音になったのと同様に、o/u-i も融合した中間音の i が発音されていたというものである。i は i よりも中央よりの中舌高母音であるが、やがて i は i に淘汰されてしまう。母音の変化を通時的に記述すると次のようになる。

(15) 母音交替の通時的規則

- a. kamu+i# → kamii → kamī → kami 「神」
- b. ko+i# → kii → kī → ki 「木」

本稿では、母音交替は複合語語幹の前舌化・後舌化による現象であると述べたが、現代語の「かみ」(神)、「き」(木)、「あめ」(雨)のような語末語幹形が基本形であり、複合語で「かむ」、「こ」、「あま」に変化したと考えるのはどうであろうか。このような複合語の母音交替現象は、次のように書ける。

(16) 複合語の後舌化と低舌化

- a. kami → kamu 「神」 後舌化
- b. ki → ko 「木」 後舌化・低舌化
- c. ame → ama 「雨」 後舌化・低舌化

(16)の複合語母音交替は母音の後舌化・低舌化によるものであり、接尾辞 -a が付加されたと考えられる。しかし、その場合は kami が kamu になる現象が説明できないだけでなく、ki-a が ko, あるいは中央よりの kö に変化する音韻現象も不自然である。(16)の母音交替を統一的に説明する規則はありえない。松本氏の指摘するウムラウト現象だけでなく、日本語の二重母音を見ても、母音の舌の移動は前舌と高舌へ向かうのが一般的であり、後舌と低舌への移動は稀である。

5. a と o の母音交替

u ~ i, o ~ i, a ~ e の母音交替は、名詞語幹に接辞 -i の付加した音変化であると述べた。本稿では、もう一例、a ~ o の母音交替について、「白」を第1要素とする複合語と、「夜」を「や」、「よ」、「よる」と発音する複合語の違いについて見てみる。

「白」は次の (17) と (18) のように、「しら」と「しろ」に発音される。

(17) 語幹末 a の連結複合語

[sira+ae]_N 白和え (しらあえ)

白板, 白梅, 白絵, 白髪, 白樫 (しらかし), 白樺, 白紙, 白櫛, 白雲, 白け, 白声, 白鷺, 白地, 白砂, 白玉, 白土, 白露, 白波, 白羽, 白旗, 白浜, 白姫, 白雪, 白帆

(18) 語幹末 o の断止複合語

[siro#an]_N 白餡 (しろあん)

白犬, 白兎, 白馬, 白瓜, 白鬼, 白帯, 白刀, 白鳥, 白酒 (しろき), 白狐, 白衣 (しろきぬ), 白鯨, 白靴, 白熊, 白胡麻, 白米, 白桜, 白酒 (しろざけ), 白砂糖, 白装束, 白鉛, 白水, 白味噌, 白餅

同じ漢字を用いながらも、二つの発音と意味の違う複合語、いわゆる同綴異音異義語も次のようにある。二つの語は語源上は同じであろうが、若干の意味変化や意味の追加が見とめられる。

(19) 「しら」と「しろ」の異義語

a. 白藍：しらあい—藍の浅い色

しらあい—藍 (インジゴ) を還元して得る白色の粉末。アルカリ液に溶解し、藍染めに用いる。はくらん。

b. 白革：しらかわ—白い揉 (も) み革。なめした鹿革で、いぶしていないもの。

しらかわ—白いなめしがわ。

c. 白黒：しらくら—(シロクロの訛) とやかくいう理由。

しろくろ—①白と黒。②画面がカラーでなく、白と黒で表される写真・映

- 画・テレビなど。③よしあし。是非。無罪か有罪か。こくびやく。
- d. 白塗り：しらぬり—銀でめっきをすること。
しらぬり—白く塗ること。白く塗ったもの。
- e. 白星：しらぼし—かぶとの鉢に打つ鍍銀（とぎん）の星。
しらぼし—①中が白い星形または丸形のしるし。②相撲で、勝ちを表すしるし。勝ち星。転じて、成功。手柄。
- f. 白白：しらじら—①いかにも白いさま。また、夜が次第に明けて白むさま。②あからさまなこと。はっきり。③興ざめであるさま。また、そらぞらしいさま。
しろじろ—めだって白いさま。
- g. 白地：しらじ—①瓦・陶器などの、まだ焼かない生土のままのもの。②紙・布などの、まだ何も書いたり染めたりしていない、白い地のままのもの。
しろじ—②紙・布などの、地質の白いもの。
- h. 白子：しらこ—①魚類の精巢の俗称。②⇒しろこ。
しろこ—人間や動植物でメラニン・葉緑素などの色素を欠き、多くは白色となった固体。しらこ。

語幹末母音が a と o の複合語を比べてみると、a 語幹末母音が連結複合名詞であり、o 語幹末母音が断止複合語であるように感じられる。それは、「しろ」が語末の発音であると同時に、(18)の語は形容詞「白い」と意味的な置換（白犬=白い犬、白装束=白い装束）がなされるからである。更に、断止形式の語幹末音が o であるのは、「頬白」、「真っ白」は「ほおじろ」、「まっしろ」と発音され、「ほおじら」、「まっしら」とは発音されないことから分かる。

「しら」が「しろ」に音変化したとすると、まず第1に考えられるのは、接辞 -u が添加 (sira-u# → siroo → siro) したことであろう。a-u が oo 融合するのは arigata-u → arigatoo 「有難う」にも見られるように一般的な現象である。a ~ o の交替が -u 添加によるものだとすると、a 語幹末名詞には -i 添加と -u 添加の二種類の名詞群があることになる。しかし、その場合問題となるのは、「しら」への -u、あるいは -o 接辞の添加の出所が不明であることである。a ~ o の交替について、松本氏は次のように述べている。

(20) a ~ o の母音交替 (松本 1995: 49)

すでに検討した a ~ e⁽²⁾, o/u ~ i⁽²⁾ の交替が語幹の末尾音節に関わるものであったのに対して、ここで対象となる a ~ o の交替は、語幹部に現れ、当該幹の文法的というよりもむしろ意味的な変容を伴うものである。

松本氏が、a～oの交替には意味的な変容が伴うと述べているのは、pasa「挾」～poso「細」、kura「暗」～kuro「くろ」、pira「開」～piro「広」、ka「彼」～ko「此」(p. 50)のような、語源的には同じ語でありながら、母音変化によって意味の異なる二つの形態素になった語のことを指しているのであって、「白」のようにつづりが同じで発音の異なる語には必ずしも当てはまらない。次の語はaとoの二つの発音を取る複合語であるが、『広辞苑』では同義語として扱われている。

(21) 語幹末 a～o の複合語

[sira+ao]_N → [siro+ao]_N 白青

白襖(しら／ろあお)、白赤毛、白葦毛(しら／ろあしげ)、白蟻、白泡(しら／ろあわ)、白糸、白薄様(しら／ろうすよう)、白鹿毛(しら／ろかけ)、白重ね、白金物、白髪(しら／ろかみ)、白木、白菊、白絹、白首、白輿(しら／ろごし)、白搾り、白炭、白妙(しら／ろたえ)、白柄(しら／ろつか)、白月毛、白鳥、白南風(しら／ろはえ)、白人、白眼

(21)の「白」には「しら」と「しろ」の二つの発音があるが、「しら」の発音が基本形であることは、これまで見てきた母音交替にならって、ほぼ断定できる。(21)の語は二つの発音を持つ連結複合語であり、同義語であることから、a～oは自由変異である。自由変異は、語幹の発音を現代の単独語の発音に変えたものであるので、複合語の意味を変えるものではない。

このa→oへの自由変異は、母音の高舌化現象であるが、連結複合語の自由変異が断止複合語の発音を誘導したのか、母音の高舌化による語末語のoが連結複合語に自由変異をもたらしたのかは確かでない。しかし、これまで述べてきた母音交替のように、時代の変化と共に語末音の発音が連結複合語の発音に自由変異をもたらしてきたことを考えれば、a→oの高舌化が断止形式として存在したことになる。

aをoに変えたのは断止形式を作るためなのであるが、その音韻的裏付けは何であろうか。筆者は、母音変化は、接辞の添加と同様、形態素間の境界を一層強めるものであると思う。aは調音上最も近く、最も変化しやすい音oを断止形式としたのである。このことから、a～oの母音交替には、接辞の添加はないと考える。

a～oの母音交替は、aからoへの変化と見なすのはほぼ疑いのないところであるが、「しら」が古く、「しろ」が新しい発音だとは言えないような語がある。「白魚」は「しらうお」が新しく、その古名は、「しろお」である。しかし、これは「しろお」の派生をsira-uo → sirooo → sirooのように、auの融合と短母音化による発音変化と考えれば説明がつく。「しらうお」

が定着したのは、連結複合語の意味合いが強いことと、「魚」は単独では「うお」と発音するのが一般的だからであろう。

a～oの母音交替には、他に、「夜」が「夜間」,「夜景」では「や」と発音され、「夜汽車」,「夜話」では「よ」と発音される現象に見られる。これまで述べてきた名詞形と違い,「や」と「よ」は、次のように複合語の第1要素だけでなく、第2要素にも現れる。

(22) 「夜」が「や」の複合語

a. 第1要素が「や」

[ja+ei]_N 夜営

夜宴, 夜会, 夜行 (やぎょう/やこう), 夜勤, 夜具, 夜警, 夜景, 夜叉, 夜食, 夜戦, 夜中 (やちゅう), 夜直 (やちよく), 夜盗 (やとう), 夜泊, 夜半, 夜遊 (やゆう), 夜話 (やわ)

b. 第2要素が「や」

[sei+ja]_N 聖夜

星夜, 静夜, 熱帯夜, 秋夜, 昼夜, 常夜, 長夜, 明夜 (みょうや), 涼夜, 昨夜, 一昨夜, 即夜, 白夜 (はくや), 翌夜, 十六夜, 五夜, 後夜, 十五夜, 三五夜, 七夜, 御七夜 (おしちや), 日夜, 八十八夜, 通夜, 徹夜, 暮夜 (ぼや), 初夜, 除夜, 寒夜, 今夜, 十三夜, 深夜, 先夜, 前夜, 春夜 (しゅんや), 連夜

(23) 「夜」が「よ」の複合語

a. 第1要素が「よ」

[jo+ake]_N 夜明け

夜遊び, 夜歩き, 夜討ち, 夜風, 夜語り, 夜越え, 夜雨 (よさめ), 夜晒し (よざらし), 夜中 (よちゅう), 夜中 (よなか), 夜空, 夜立ち, 夜詰め, 夜露, 夜通し, 夜床, 夜長, 夜盗 (よとう), 夜直 (よただ), 夜逃げ, 夜店

b. 第2要素が「よ」

[tsuki+jo]_N 月夜

暁夜, 秋の夜, 朝月夜, 薄月夜, 雲夜, 小夜, 年の夜, 長き夜, 長夜, 初夜 (はつよ), 夕月夜, 星月夜, 朧月夜 (おぼろづきよ), 雨夜 (あまよ), 闇夜, 夜々 (よよ), 朧夜, 春の夜, 冬の夜, 雪月夜

(22)と(23)には、漢字は同じでありながら、発音によって意味の異なるものもある。「夜直」

は、「やちよく」は「夜の当直」であるが、「よただ」は「夜通し」の意味である。また、「夜中」は「やちゅう」は「夜のうち。夜の間」で、「よじゅう」は「一番中。終夜」で、「よなか」は「夜のなかば。夜半」である。これらを同じ種類の複合語と見なして良いのだろうか。

「しら」と「しろ」の母音交替にならえば、「や」は連結複合語を形成し、「よ」は断止複合語を形成することになる。更に、「夜」は「夜が明ける。夜を徹する」のように、単独では「よ」と発音されることも決め手となる。しかし、(22)の音読みの複合語と(23)の訓読みの複合語を比べてみると、「や」と「よ」の違いが母音交替によるとは思われない。「や」と「よ」は音読と訓読であるので、発音の語源が違っており、それぞれが基本形であると考えられる。従って、「夜」の複合語の発音は「よ」か「や」のどちらかであって、「白」のような「白青(しら/ろあお)」、「白糸(しら/ろいと)」の自由変異はない。「夜」には異音同義語は存在しないのである。(22)と(23)の語は、一つの語彙としての意味合いが強い連結複合語である。

現在、「夜」の単独の発音、つまり、断止形式として、「よ」と「よる」の二つがある。「よ」と「よる」の語源として三つ考えられるであろう。一つは、「よ」に接辞「る」が添加された形が「よる」だとするもの、二つは、「よる」が語源であり、「る」の削除した形が「よ」とするもの、三つ目は、「よ」と「よる」はそれぞれ語源が異なるとするものである。

筆者は、本稿では一貫して、基本形への母音変化や接辞の添加が形態素境界を一層強くするという立場を取ってきた。「よる」にも同様の原則が適用し、「よ」に助辞「る」が添加した断止形式が「よる」であると考えられる。助辞「る」の出所は明らかではないが、「昼」(ひる)と対立的に用いられる形にしたのではなかろうか(『日本国語大辞典』「よる」参照)。「よ」に対する助辞「る」の添加は、「夜」の断止形式が時代の変化と共に、「よ」から「よる」へと移ってきたことをも証明できる。現代語では「よ」と「よる」は共に「日没から日の出までの時間」を意味するが、元来、二つは意味が異なっていたようである。『日本国語大辞典』には、「元来、『よる』は『ひる』に対して暗い時間帯全体をさすのに対して、『よ』はその特定の一部分だけを取り出していう」と記載されている。

「よる」は複合語を作らないとも言われるが、「よる」を第1要素とする複合語が、『広辞苑』には次のように19語載っている。これらは断止複合語と見なされるものである。

(24) 「夜」が「よる」の複合語

a. 第1要素が「よる」

[joru#kata]_N 夜型

夜顔、夜去らず、夜席、夜の秋、夜の御殿(おとど)、夜の御座(おまし)、夜の衣、夜の蝶、夜の鶴、夜の殿、夜の帳(とばり)、夜の錦、夜の寝覚、夜の物、夜光る玉、

夜昼, 夜夜中, 夜夜

b. 第2要素が「よる」

[ko#yoru]_N 小夜 御夜 (およる)

「よる」が複合語の末尾に来る例が少ないのは、「よる」は「よ」よりも断止形式としての要素が強いためである。例えば、「冬の夜」, 「長き夜」の「夜」を「よる」と発音すれば、名詞句の意味になってしまう。ちなみに、「小夜」は、「さよ」は「夜」の意味であり、「こより」は「小形の夜着」である。

6. 非母音交替

これまで母音の交替について述べてきたが、交替しない母音も多くある。

(25) 非母音交替名詞

- a. 山 (やま) : 雪山, 裏山, 山嵐, 山狩, 山陰, 山桜, 山里
- b. 石 (いし) : 置石, 玉石, 石臼, 石垣, 石工, 石段, 石堀
- c. 松 (まつ) : 赤松, 門松, 松毬 (まつかさ), 松風, 松枯葉, 松皮, 松葉
- d. 梅 (うめ) : 青梅, 白梅, 埋め合せ, 梅暦, 梅酢, 梅干, 梅見
- e. 糸 (いと) : 琴糸, 墨糸, 糸打, 糸車, 糸雨 (いとさめ), 糸巻, 糸道

(25)の発音は、これまで述べてきた複合名詞か名詞句かの見地からすると、語幹末に語境界を取る断止複合語であると思われる。しかし、語の中には連結複合語としての要素を持つものも多く、母音交替の複合語のように決め付けることはできない。これらの語には歴史的にも母音交替が起ったと思われる要因を見つけ出すのが難しいので、語幹の発音がそのまま現代語の基底形に引き継がれてきたと思われる。

7. おわりに

古代日本語の母音交替の研究は, ama「甘」～ame「飴」, ma-paru「回」～me-guru「周・廻」, awo「青」～awi「藍」, utu「空・虚」～uti「内」, kura「暗」～kure「暮」, joki「避」～yoko「横」のような語源に基づく母音交替や, tobu～tobasu「飛」, aku～akasu「明」, oku～okosu「起」, oru～orosu「下」, magu～magaru「曲」, josu～joseru「寄」のような動詞の活用変化に

基づく母音交替の研究などがあるのだが、本稿は同一漢字に読み方の相違が見られる複合名詞に注目した。上代の日本語には全く疎い筆者には、通時的に母音の交替現象を説明することなど及びもつかないが、本稿では、音韻上、あるいは形態上、妥当と思われる説明と記述を試みた。そして、元来、範疇の小さい形態素である語根が基本形であったのが、時代の変化と共に基本形と複合語形成の概念が変化してきたのが分かった。現代では、新しい複合語を作り出す際には、語幹末母音の発音を持つ断止形式の複合語しか生まれないのではないだろうか。更に、今後は複合語に代わって、生産的な名詞句が多用されるようになるのではないだろうか。

参 考 文 献

- 有坂秀世 (1955) 『上代音韻攷』三省堂。
有坂秀世 (1968) 『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂。
大野 晋 (1978) 『上代仮名遣の研究』岩波書店。
北原保雄 [編] (1990) 『日本語逆引き辞典』大修館書店。
小学館編集部 (2000) 『日本国語大辞典』第2版, 小学館。
新村 出 [編] (1998) 『広辞苑』第五版, 岩波書店。
橋本進吉 (1966) 『国語音韻史』岩波書店。
松本克巳 (1995) 『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈』ひつじ書房。
毛利正守 (2004) 「歴史的仮名遣いは表語か表音か」『月間言語』8月号, 42-45。